市長賞

中勘助「鳥の物語」を巡って

和田博史

「中さんの作品でお勧めは何ですか。」地元有名劇団Sの女優Tさんからの質問です。「そうですね。ここ羽鳥の子供たちのために書いた『白鳥の話』かな。中勘助が最も好んだ作品『鳥の物語』の中の一話なんです。」

葵区新間の中勘助文学記念館で管理人を務めている私は、多くのお客様と交流してきましたが、このお勧め作品についての問答から、「鳥の物語」を巡って新しい展開が始まりました。Tさんとは昨夏、文学作品の朗読を劇団Sの俳優から電話で聴けるという企画があり、朗読のあと私から中勘助について案内して、昨秋、当記念館を訪問していただきました。中夫妻が終戦近くに仮住まいをしていた杓子庵で、羽鳥の生活について話をしている時に、冒頭の質問となったのです。その後の展開については現在進行形なので後述します。

そもそもなぜ「鳥の物語」をお勧めしたのか？　まず、中勘助の作品の中での位置づけについて少し理屈っぽく私の考えを述べます。彼は素晴らしい随筆家ですが、一般的には自伝的小説「銀の匙」の作家として知られています。私見では、彼の小説は三つのタイプに分類出来ます。その三分類は、正・反・合の弁証法を想起させます。正＝テーゼはもちろん代表作「銀の匙」です。揺籃期の懐かしい思い出を瑞々しい感受性、美しい

日本語で淡々と綴っています。反＝アンチテーゼは「犬」「提婆達多」「菩薩樹の蔭」という人間性の暗部、情念を剔抉した衝撃の三部作。古代インドを舞台にした超現実的な設定で、時代状況もあって「犬」は発禁処分となりました。そして正・反を止揚した合＝ジンテーゼとしての「鳥の物語」。無垢な善意、まごころ、哀しみ、自己犠牲などに溢れた味わい深い作品です。十二羽の鳥が王様の前で日本や中国の古典、聖書などの逸話を題材に物語るという「成人のための童話」です。そもそも弁証法は歴史法則としては概ね失敗ですが、むしろ個人の精神史に当てはまると思います。中勘助の場合も然り。泉下のヘーゲル先生が癇癪を起こしそうな私の独断を、当地で文学上の師と仰ぐ碩学T先生に披露したところ、牽強付会とは言わずに、それも面白いね、とおっしゃいました。何と寛大な師なのでしょう。

当記念館に勤め始めて間もないころ、親しくご教示いただくT先生が、この本いいよ、と「鳥の物語」を古本屋で探してきてくださいました。当時「鳥の物語」は重版未定になっていて、普通の本屋では買えなかったのです。読み始めたら本当に面白くて、さらに人生を肯定する気持ちになれます。執筆していた勘助自身が慰藉されたことでしょう。淡々とした筆致の「銀の匙」より物語性に富んでいて、ぐいぐい引き込まれました。

来館者にも紹介してお勧めしたところ、多くの人が読んでみたいと仰います。せっかく購入して読みたいと言う方に、古本屋やインターネットで探してくださいと申し上げるのは心苦しいですね。そこで私は県内最大手T書店の書籍責任者Oさんを訪ねて、復刊出来ないか相談することにしました。するとOさんも中勘助の作品に親しんでいて、「鳥の物語」は愛好する一作だったのです。同書を復刊して、より多くの人に読んでいただきたいという私の要望に賛意を得ました。ただ「鳥の物語」は人口に膾炙した作品ではないので、出版元に復刊してもらうのは容易ではないとのこと。署名活動をしましょうか、とOさんは言ってくれました。幸い、Oさんの熱意ある出版社への働きかけにより、昨年1月に待望の復刊が実現しました。さらに、T書店の一角に「鳥の物語」を中心とした中勘助コーナーを設けていただき、私も意気揚々と知人、来館者に紹介を始めました。そうしたやり甲斐のある充実した日々が半年ほど続いたあと、昨年7月にT書店静岡本店が閉店してし

まったのです。出版不況のなかとはいえ、静岡の書籍文化の象徴がひとつなくなりました。

当地の多くの読書人にはとても残念なことでしたが、しかし、T書店を退職したOさんは新たに新刊書店を開業したのです。その店名は「鳥の物語」の一話「ひばりの話」に因んでいます。この厳しい時節に、本への愛情をもって敢えてリスクを取った彼の勇断に敬意を表します。もとより中勘助作品の普及に尽力いただいたことには深く感謝しています。私としては、自分の本代の殆どは彼の店で費やし、本好きの知人、来館者に紹介するなど微力ながら応援しています。

昭和6年に書き始められた「鳥の物語」の中でも印象的なのは「白鳥の話」です。昭和18年10月静岡に移住してから羽鳥の子供たちのために書いた名編で、女優Tさんにお勧めした作品です。中国の戦国時代、趙の国の智慧遅れの王子のために、無垢な小びと邯鄲（かんたん）が、南方に去った白鳥を追い求める苦難の旅、その一途な忠誠心、白鳥の群れを連れ帰った邯鄲が王様の前で宙返りをする大団円など、読者の心を洗います。中勘助が後記の中で「計画したよりもずっと難しくなっている。しかし童話は成長しないけれど子供は成長する。あの子たちにとってこれが適当な読み物になる日がやがてくるであろう。」と言っているように、子供の成長に期待したのです。Tさんは勘助の心情に感銘を受け、当時の子供たちのために当記念館で朗読をしたいと言ってくれました。このありがたい申し出に私は欣喜雀躍（きんきじゃくやく）です。残念ながらその後のコロナ感染拡大のため、収束後に延期して、実施時期を検討中です。また、朗読準備に当たってTさんが原典を確認したいと仰ったことに大変感心しました。そこで私も調査したところ、勘助は古事記にある二つの話から思いついたと述べています。すなわち垂仁天皇の口をきかない御子の成長譚と、死して白鳥となった日本武尊の伝説です。さらに、アナトール・フランスの「聖母の軽業師」という感動的な小品をモチーフにしているようです。これは、幼少期に勘助に可愛がられ、長じて彼の研究をされているO先生に伺った解釈です。学識の深い勘助のこと、先達の文学を換骨奪胎して、「白鳥の話」という心温まる作品を物したのですね。女優Tさんの質問から私も本作の理解を深めることが出来ました。当記念館での朗読会については、今秋には実現できるのではと一日千秋の思いです。

「白鳥の話」執筆のころでしょうか、次のような詩があります。

童話のかきぞめさい先よしや
鶉の卵を三つもろた
けけかかか
鬼がでるかよ佛がでるか
なんのうづらの雛がでる
けけかかか

勘助は飄逸な詩作の人でもあります。また、オノマトペの秀逸さは「鳥の物語」にも通底するところです。

次に私の大好きな「鶉の話」という哀切な一話があります。都の大臣藤原不比等が讃州志度の浦で大切な贈り物の玉を荒海に失い、海女の現地妻・奈古に海底に奪還に行くよう命じて、物語は哀しく展開します。玉を取り戻したあと龍神のもとで命を永らえ、無心に乳房をまさぐる我子を想い涙にくれる奈古の哀れさ、その筆致の見事なこと。5年前に当記念館で劇団Sの女優Kさんの朗読を目の当たりにして、舞台さながらの躍動感ある語り口に魅了されました。直ぐに劇団Sの個人会員となり、以来同劇団の公演を楽しんでいます。

物語の終焉で、息子房崎の大臣が母を訪ねるのに呼応して、異類と化した奈古が海底から昇っていく、夢ともなく、現ともなく、西のかたへ。美文調の真骨頂で、同じ龍神伝説に連なる泉鏡花の佳作「夜叉ケ池」の龍神・白雪姫の怒りの場面を思い起こさせます。なお、「鶉の話」の原典は謡曲「海人」であることを女優Kさんから教わりました。

余談ですが「鳥の物語」を通して知り合った二人の女優TさんとKさんについて、感心することが多々あります。まず、朗読、演技する作品について真剣に調べて、深く理解すること。Tさんは、演技は削ることと言います。作品の様々な要素の中から余分なものを削って演ずるのでしょう。その真摯な姿勢に私も学ばねばと思います。次に、舞台では激しい演技、立ち廻りをするひとが、お会いすると謙虚で知的な女性なのです。私

のように、口から出るのは自慢話、耳に心地よいのは誉め言葉、という人間には到底真似できない態度です。さらに、昨年来のコロナ禍で舞台公演がままならない状況下で、様々な試みをして立ち向かっているのです。そんな二人を応援しているつもりが、こちらが勇気をもらっていることに気付きました。「鳥の物語」を介して素晴らしい方々に出会えたことに感謝です。

今年一月こんな嬉しい来館者がありました。65歳定年退職した男性で、美術館、文学記念館などを巡る日々。「銀の匙」を昔読んだと仰るので、「鳥の物語」を紹介して話が弾みました。数週間後再訪されて、「本買って読みました。とても良かった。」とのこと。「鳥の物語」の読者が増えたことはもちろん嬉しかったのですが、何よりも私の案内を真っすぐに受け止めて応えてくれたことに感激しました。こうした誠実、善意こそ「鳥の物語」の基調にあると思うからです。私自身、同書の一愛読者で、人生肯定の人間観に共感しています。この心休まる物語をひとりでも多くの方に知っていただきたい。当記念館に出勤した朝は、中さんの厳粛で慈愛に満ちた眼差しを感じながら、今日もお客様に「鳥の物語」を案内したいと念じています。